書評・紹介

北京経済学院人口経済研究所
『全国千分之一人口生育率抽祥調査分析』

人口与経済　特集号，1983年7月，175ページ

中国人口に関する情報は，ごく最近まで断片的なものが公表されるのみで，その全体像は謎に包まれていた．ところが1982年7月に実に18年ぶりに第3回の人口センサスが実施され，同年10月に手集計による速報が公表されることによって，中国人口像の一端が明かにされた．また1982年9月に実施された「千分の一抽出全国出産力標本調査」の集計結果の概報が1983年4月に発表され，中国人口の動態面での実態の一部が明かになった．

「全国千分之一人口生育率抽祥調査」と名付けられているこの調査は，都市では住民委員会，農村では生産大隊を単位として，台湾とチベットを除く28の省市から815の標本単位を抽出し，そこに居住する15～67歳の31,485人の女子を対象とした面接調査である．概報では，「出産可能年齢の女子の人口学的属性」，「結婚」，「出産力」，「家族計画の実施情況と一人っ子証の受領状況」についての概略が示されていて，たとえば，平均結婚年齢は1940年代以降次第に上昇しており，1970年代末には23歳まで上昇したが，81年には22.8歳であったこと，平均出生児数は1990年代は5.68人と多かったが1981年には2.36人にまで縮小したこと，既婚の出産可能年齢の女子1億7000万人のなかで69％強の1億1800万人が何らかのかたちで家族計画を実施していること，そのなかでＩＵＤの利用者が約半数を占めていることなどが報告されている．

「全国千分之一人口生育抽祥調査分析」と名付けられた本書は，北京経済学院人口経済研究所発行の機関誌『人口与経済』の特集号として1983年7月に発行されたもので，調査結果の分析を中心とした28の論文が収録された論文集である．執筆陣は共著者を含めると50人に達している．

中国国家計画生育委員会の長である銭信忠の序言と調査の重要性を強調した季宗権の短い文章につづく3編の論文は，集計結果の概要，調査デザイン，調査の精度について解説されたものである．2番目の論文には調査票が掲載されているが，そこには人工妊娠中絶史に関する調査項目が含まれていることが注目される．

以下の23編が出生力そのものに関する研究報告であるが，これらは大別すると次のように分類できる．すなわち，(1)中国人口の出生力の時系列的変化に関する分析（2編），(2)出生順位に関する分析（3編），(3)平均出生児数に関する分析（1編），(4)結婚持続期間と出生力に関する分析（2編），(5)教育程度，職業，民族のちがいによる出生力格差に関する分析（4編），(6)結婚に関する分析（7編），(7)家族計画の実施状況に関する分析（3編），(8)人口の男女構成に関する分析（1編）である．論文には数ページに満たない短いものから10ページ近いものまで長短はあるが，いずれも力作で，中国人口研究者の出産力調査にかける意気込みがうかがわれる．なお，ほとんど大部分の論文が，全国，都市（城鎮）・農村別の比較を行っていて，農村部での出生力の（相対的な）高さが如実に示されている．

また付表として(1)1950～79年の女子の年齢各歳別の出生率（全国，市部，郡部），(2)1980年の出生順位別・女子の年齢各歳別出生率（全国，市部，郡部），(3)1981年の出生順位別・女子の年齢各歳別出生率（全国，市部，郡部），(4)1950～81年の女子の年齢各歳別の初婚率（全国，市部，郡部）が収録されている．

（河邊　宏）